様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　８ 日現在

機関番号：３２６３８
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ２１９９３

研究課題名（和文）「手段」を表すスペイン語前置詞の意味分析

研究課題名（英文）Semantic Analysis of the Spanish Prepositions of the Meaning of "Means"

研究代表者
長縄　祐弥（NAGANAWA, Yuya）

拓殖大学・外国語学部・助教

研究者番号：７０８８０５０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、スペイン語の前置詞が有するさまざまな意味のうち、手段の意味に焦点をあて、この意味を一部に有する前置詞であるa, de, en, con, porをとりあげ、その使い分けに関する考察をおこなった．加えて、それぞれの前置詞が有する手段の意味と空間的意味の関係性を観察することで、手段の意味を有する前置詞が多岐に渡る理由を明らかにした．本研究の成果については、学会および研究会において研究発表をおこなった．

研究成果の学術的意義や社会的意義
前置詞のあるひとつの意味に着目すると、さまざまな前置詞がその意味を有していることが多い．同じ意味であるという理由で、どの前置詞を使えるということはなく、その使い分けに何らかの規則が見いださせる．本研究では、前置詞の後に続く語句に注目し、その規則を明らかにした．さらに分析対象とした前置詞が有する空間的意味にも着目し、この空間的意味の差異が手段のニュアンスの差異をもたらすことを主張した．

研究成果の概要（英文）：In this study, among the various meanings of Spanish prepositions, we have focused on the meaning of “means” and analyzed the usage of a, de, en, con and por, which are the prepositions with the meaning. In addition, by observing the relationship between their meanings of means and space, we have clarified the reason why there are many prepositions of means. The results of this study were presented at several conferences and research meetings.

研究分野：スペイン語学

キーワード：スペイン語　前置詞　意味論

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

これまでの先行研究では、前置詞の意味は動詞の意味に関連づけられて記述されることがほとんどであった. ただし、その記述自体は誤りではないものの、各々の動詞が被制辞として要求する前置詞は定まっていることは多く、動詞の意味と前置詞の意味に関連性は往々にして観察される. 一例として前置詞 en を取りあげると、この語の空間的意味は「内部」あるいは「表面の上」を表すものとされているが、いずれの意味であるかは共起する動詞によるものとされてきた. 例えば entrar「入る」や meter「入れる」は前置詞 en を要求し、このとき en は「内部」を意味する. しかしながら、以下の(a)および(b)に観察されるように、動詞だけではなく、前置詞に共起する名詞句や主語にあたる名詞もまたその前置詞の意味を決定づける要素になりうる.

(a)	La	botella	está	en	la	nevera.	「ビンは冷蔵庫の中にある.」
	the	bottle	is	in	the	refrigerator	
(b)	La	nota	está	en	la	nevera.	「メモは冷蔵庫(の扉)にある.」
	the	memo	is	in	the	refrigerator	

(a)では「内部」を表す一方で、(b)では「表面の上」を表しており、それぞれ空間的配置が異なる. この差異は冷蔵庫、ビン、そしてメモの百科事典的知識によって生じると考えられる. このように、共起する名詞句が有する百科事典的知識によって前置詞の意味がより明確になると考えられる.

2. 研究の目的

本研究では「手段」の意味に焦点をあて、その意味を有するスペイン語の前置詞をとりあげ、その前置詞に後続する語句、とりわけ名詞句にどのような共通点が見られるか考察をおこなうことで、それぞれの前置詞の意味範囲を明確にする. 本研究の具体的な目的は以下の 3 点である.

I. 「手段」の意味を有する前置詞は比較的多い(a, de, en, con, por)が、それらは単に交替可能であるのか、あるいはそれぞれ使い分けがおこなわれる場合、どのような要因によるものであるのかを明らかにする.

II. 使い分けがあり、それが前置詞と共起する名詞句によるものである場合、それは共起する名詞句の百科事典的知識によるものであることを確認する.

III. 「手段」の意味を有する前置詞が多岐に渡る理由を、それぞれの前置詞が有する空間的意味との関連を記述しながら、明らかにする.

3. 研究の方法

本研究では認知意味論の理論を援用しながら、前置詞の意味は共起する動詞だけではなく、前置詞の後に共起する名詞句もまたその意味に影響を与えることを明らかにすることを目的とする. 具体的には、スペイン語の前置詞が有する「手段」の意味に焦点をあて、その意味を有する前置詞をとりあげ、共起する名詞句に観察される特徴について考察をおこなう. これにより、前置詞とそれに続く名詞句を単にイディオムと見なすではなく、前置詞と名詞句、さらには動詞がどのような特徴を有しているのかによって、その前置詞が選択される動機を明らかにすることが可能である.

本研究では、この博士論文で得られた方法論が en 以外の前置詞にも適応可能かどうかを検討することも目的としている. その方法論とはすなわち、ひとつは意味分析をおこないたい前置詞 1

語のみを観察するのではなく、その前置詞と意味的に関係のある前置詞も一緒に考察をおこなうこと、そしてもうひとつは、前置詞と名詞句の関係を考察する必要があるため、動詞が前置詞の選択できる限り影響が及ばないような例文を観察することである．これらの方法論が本研究に応用可能な場合は同様の手法で分析をおこなうが、可能でない場合にはその理由を考察したうえで、新たな手法で意味分析をおこなう．
そして、最初にあげた方法論を活用するために、本研究では特定の前置詞の意味分析をおこなうのではなく、比較的多くの前置詞（a, de, en, con, por）が有している「手段」の意味を取りあげ、それらの前置詞を用いた用例を比較することで、それぞれの前置詞の意味範囲を記述する．

4．研究成果
（1）2020 年度ではスペイン語の前置詞が有する「手段」の意味に焦点をあて、この意味を有する前置詞である a, con, en をとりあげ比較考察をおこなった．この成果については 2021 年 10 月 10 日、日本イスパニア学会において口頭発表をおこなっている．先行研究のなかには、「手段」の意味に関して特に a と con の差異について考察をおこなっている研究はあるものの、a は con に比べて道具のニュアンスを強調していると述べる研究がある一方で、道具ではなく方法を表すと述べる研究もあり、主張が研究者によって異なっている．そこで、今回は特定の前置詞に限定するのではなく、意味に焦点をあてることで複数の前置詞の意味の比較考察をおこなうことを念頭におき、具体的にはこれら 3 語の前置詞に道具や器具を表す名詞（lápiz「鉛筆」, pluma「ペン」, cuchillo「ナイフ」, tenedor「フォーク」, cuchara「スプーン」, microondas「電子レンジ」, teclado「キーボード」）を共起させ、コーパス（CORPES XXI）を用いてそれぞれの出現件数を調べた．
共起させた名詞はそれぞれ筆記具、カトラリー類、場所とも捉えられる道具として分類できるが、これらのカテゴリーで前置詞が使い分けられるというよりはむしろ語によって a と使われやすい語、con と使われやすい語が存在するものの、同じ道具であっても a tenedor や a cuchara のように a が用いられない例も確認された．一方で、microondas や teclado は道具ではあるが、その形状が箱形あるいは平面であるゆえに a や con よりも en が用いられやすいことが明らかになった．

（2）2021 年度ではまず、2020 年度におこなった口頭発表の内容をもとに論文を執筆し、2022 年 3 月発行の『拓殖大学語学研究』146 号において発表した．この論文における考察の結果、手段の意味を有する前置詞として con がデフォルトで使用されることが認められたが、a, de, por といった他の前置詞もまたこの意味を有しており、それぞれのニュアンスの差についても考察をおこなう必要があると思われた．そして、手段の意味を表す前置詞が多岐に渡り、かつその意味が異なるのは、各々の前置詞が有する空間的意味が異なるためではないかという仮説が浮かびあがったため、テーマを修正した．すなわち、空間的意味から手段の意味が拡張しているプロセスを観察し、これらふたつの意味の関連性に関する考察をおこなうことを次の課題とした．
各前置詞を観察していくと、空間的意味のときの特徴と手段の意味のときの特徴がおおむね一致しており、仮説が成り立つように思われる．例えば、前置詞 a は近接を表す空間的意味を有するものの、その意味で共起可能な名詞は限られている．その一方で、手段の意味で共起可能な名詞を観察すると、空間的意味と同様に限定的である．このような考察に加え、これら 2 つの意味の関連性をさらに観察するために、どのようなプロセスを経て、空間的意味から手段の意味が拡張

したのか考察をおこなった．この考察は、空間的意味から様々な意味が拡張していることを示すひとつの証拠となり、さらには意味拡張のプロセスを観察するためのひとつの方法論となりうることが期待されるものである．

（3）2022 年度は、役割のひとつに手段の意味を有する前置詞である a，con，en，por，de，desde をとりあげ、それぞれの前置詞の空間的意味および手段の意味との関連性について考察をおこなった．道具を表す名詞と共起し、かつ手段を表そうとする場合、前置詞は con がデフォルトとして選択されるものの、con 以外にも手段の意味を表す前置詞が確認され、その前置詞は多岐にわたる．このように手段を表す前置詞が様々観察されるのは、それぞれの前置詞が示す空間的意味が異なるためであるという仮説をたてたうえで、各前置詞のふたつの意味のつながり、とりわけ空間的意味から手段の意味が拡張する様子を観察した．その結果、前置詞が手段の意味を有するためには、1．経路を表せること、2．隣接していること、3．道具の形状が平面あるいは容器であることという 3 つの要素のうちのひとつが必要であることが明らかになり、手段の意味は前置詞が本来有する空間的意味と大きく関連付けられることを主張した．以上については 2022 年 4 月開催の第 445 回関西スペイン語学研究会で口頭発表をおこない、その発表におけるコメントや質問をもとに 2023 年 3 月発行の『拓殖大学 語学研究』148 号にて発表した．この研究を通じて、手段の意味を表す前置詞を選択する際、デフォルトで con が用いられることを改めて確認した一方で、con 以外の前置詞が用いられる場合には 共起する名詞の性質が大きく関わるのであるが、このときそれぞれの前置詞が本来有する空間的意味もまた関係していることを明らかにした．加えて、前置詞の中心的な意味は空間的意味であり、その中心的意味から様々な意味が拡張するというひとつの裏付けを提示し、さらには意味拡張のプロセスを観察するためのひとつの方法論を提案した．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 長縄祐弥	４．巻 145
２．論文標題 「手段」を表す前置詞に関する意味論的考察 ―a，con，enを中心に―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 拓殖大学語学研究	６．最初と最後の頁 57-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 長縄祐弥	４．巻 148
２．論文標題 空間前置詞が有する手段の意味とその意味拡張について	５．発行年 2023年
３．雑誌名 拓殖大学語学研究	６．最初と最後の頁 159-188
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 長縄祐弥
２．発表標題 「手段」を表す前置詞に関する意味論的考察―a，con，enを中心に―
３．学会等名 日本イスパニヤ学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 長縄祐弥
２．発表標題 空間前置詞が有する手段の意味とその意味拡張について
３．学会等名 第445回関西スペイン語学研究会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関